

平成三〇年十一月二十五日

仏女新聞

編集・発行 飯島可琳

京都大報恩寺

快慶・定慶のみほとけ

東京国立博物館にて、特別展「京都大報恩寺快慶・定慶のみほとけ」が開催中である。（会期は十二月九日まで）

大報恩寺千本釈迦堂は京都市上京区に位置するお寺だ。大根炊き、あるいはおかげ伝説、仏像など大報恩寺と出会うきっかけはさまざまある。同寺ホームページによれば、大報恩寺本堂は鎌倉時代初期に建てられたそうだ。さまざまな戦火を免れて創建当時の姿を今に伝えているため、現在は国宝に指定されている。大報恩寺の仏像の多くは、慶派の仏師によって手がけられたものである。本尊の釈迦如来坐像は快慶の弟子の行快、十大弟子立像は快慶、六観音菩薩像は肥後定慶（運慶の弟子と考えられる）による。それらが本展覧会の主役である。

・釈迦如来と十大弟子・



釈迦如来は秘仏として本堂にまつられており、現在は霊宝館に安置されている十大弟子と並び立つことはない。しかし、展示室では釈迦如来を囲んで十大弟子が散りばめられたような配置になっている。そして十大弟子の顔はすべて釈迦如来の方を向いている。釈迦如来と十大弟子が同じ空間に立つことで、釈迦が弟子たちに説法をしている場面が完成するのではないかと想像していた。しかし、実際に展示室に入ると、私が十大弟子立像の目を借りて釈迦如来を透視しているような感覚を覚えた。

十大弟子立像はあくまで製作の大仏師が快慶ということであって、全ての像を快慶が完成させているわけではない。十

大弟子立像の中には、快慶でも行快でもない作風、どちらかと言えば運慶に似た作風の尊像があるそうだ。

快慶自身がつくったのは目鍵連立像だ。顔や衣文のしわも腕に浮き出る血管もきれいに整えられてシンメトリーな美しさを持っている。東京国立博物館主任研究員の皿井氏によると、左右対称にしようとするのは快慶の特徴なのだそう。そうだとすると、右側の口角だけが上がっているのは意図的な造形なのだろうか。二つの横顔が楽しめるという粋なはからいだともとれるが、正面から見ると口を歪めて笑っているようにも見えない。できるならば快慶に真意を聞いてみたいところである。

・誕生釈迦仏立像・



本展覧会に出陳している誕生釈迦仏立像は大報恩寺の創建ともにつくられたものではないかと言われている。誕生釈迦仏立像と聞いてまず思い浮かべるのは東大寺の誕生釈迦仏である。誕生釈迦仏がさかんにつくられたのは、東大寺創建の時代を含む飛鳥から天平にかけての時期であるので、鎌倉時代の誕生仏は珍しい。出陳されている誕生釈迦仏も概ね形式に倣ってつくられているように見えるが、見慣れない渦巻き状の螺髪は印象的である。清涼寺の釈迦如来を意識したのかも知れない。快慶は大報恩寺の釈迦十大弟子の発願（一一一九年）に先んじて一二一八年に清涼寺の釈迦如来立像の修理を行っている。

この誕生釈迦仏立像は快慶の弟子である行快によって手が加えられた可能性が高いと指摘されている。耳に行快の特徴が認められるからだ。師匠である快慶の仕事の間近に見ながら、「清涼寺式」を弟子である行快が身に付けたという光景が頭に浮かび、技法の継承の目撃者になったような気がした。

・六観音菩薩像・

六観音菩薩像は通常「六観音」とまとめ

聖観音



て称されることが多い。しかし、本展示では定慶作六観音菩薩像の背後に大きく一体一体の名前が示されており、個々の尊像の存在を意識することができ。尊像の背中から取り外した光背は、尊像から少し離れた壁面に展示されている。来場者は観音像と光背の間を通り抜けて立像の背後を見ることができ、光背の細部に目を近づけることもできる。暗い展示室に安置され、照明によって陰影がつけられると、大報恩寺霊宝館に置か

れているとはかなり異なる雰囲気になる。博物館ならではの経験ができる。

※目鍵連立像（撮影Ⅱ京都国立博物館・岡田愛氏）、誕生釈迦仏立像（撮影Ⅱ東京国立博物館・藤瀬雄輔氏）の画像は図録よりお借りしました。会場では聖観音のみ撮影が可能です。

新聞作成にあたり、東京国立博物館の皿井舞氏、浅見龍介氏にお話をうかがいました。ありがとうございました。